

北 ぞらくろあ

第115号 2025年10月1日（毎月1日発行）

きすき
木次線ストロール⑮

だいたう
出雲大東駅

「美しい姫神の神社と

ホタルが乱舞する川」

9月15日月曜日、今日は敬老の日。わたしには子どもがいないので、お爺ちゃんと呼ばれることはないが、世間一般ではそういう年齢になったのだということを意識する。腰痛のため、遠出では杖を携帯するようになってからはなおさらだ。

7時45分頃、車で庄原の自宅を出発。沿道の田は多くが稲刈りを

終えているが、標高の高い土地では、まだ黄金の稲穂が風に揺れている。高温続きで作柄が心配だったが、地元の農家の話では「まずまず豊作」、新米を食べるのが楽しみだ。

備後落合駅の手前を左折、油木川沿いの国道314号線を上ると、白い花の群生が見える。蕎麦畑だが、以前よりも面積が小さく

なっているように感じるのは杞憂だろうか。

9時40分頃、南大東駅に到着。ここで問題が発生、車を停める場所がない。昭和38年に、木次線出雲大東駅間に新設された“停留駅”なので、駐車場は考慮されなかったようだ。車であれば、駐車場のある木次駅か出雲大東駅を利用すればいい……。

県道24号線（松江木次線）を木次方面に150メートルぐらいくくと、沿道に分別ごみの回収エリアがある。その空地の端に、邪魔にならないように駐車させてもらった。



駅舎には郵便局や飲食店が入っている



加多神社の社殿の後ろには霊水の井戸がある

10時19分発の宍道行にひとり乗車。ベースのきすき色（黄色）にピンクをトップピングした「さくら」号だ。祝日なので、10人以上の乗客がいた。高校生ぐらいの女性客が多く、宍道で山陰本線に乗り換えて、松江や出雲市に遊びに行くのだろうか。

6分程で出雲大東駅に到着。降車したのはわたしだけだが、相当数の人が乗り込んだ。山陰本線方面への利用客はかなり多いようだ。

駅ができたのは大正5年の簸上（ひかみ）鉄道開通時で、駅名は大東町駅。昭和9年に簸上鉄道が国有化され、木次線に編入されたときに、出雲大東駅に改称された。平成19年（2007年）に古い木造駅舎が解体されて、現在の駅舎になった。

出雲神話にちなんだ駅の愛称は「神阿多津姫命（かむあたとつひめのみこと）」、駅の西北にある加多神社の副祀神で、木花之佐久夜毘売（このはなのさくやびめ）の名前の方がなじみがあるだろうか。美しい姫神で、海幸彦・山幸彦の母神である。

現代的な駅舎には、飲食店（風味豊かな珈琲とそば・うどんの店「ふあーすと」）や郵便局（大東駅前簡易郵便局）が入っている。待合室も広々としていて、ゆっくりできる。民間への簡易委託駅で、

出札窓口で駅員さんが待機していて、切符を購入することができる。

スマートフォンで地図アプリを頼りに、加多神社を目指した。ネットから印刷した資料を用意していたのだが、自宅に忘れてしまった。駅員さんに地図のあるパンフレットはありませんかと尋ねたが、「ないですね」。観光に訪れる旅行者はあまりいないのだろう。唯一「赤川ほたる保存会」の会報を見つけて、一部いだいた。

駅前に、雲南市立病院がある。ベッド数281床の地域の基幹病院だ。商店街は、閉店した店舗が目立つが、かなりの規模で、往時の賑わいが想像できる。曇天で日差しは強くないが、残暑で蒸し暑い。全身に汗をかいて、長距離を歩くのも久しぶりなので、脚腰の痛みや痺れが



赤川の川底にはカワニナがびっしり

早く、立ち止まって休む頻度が増えていった。

ショッピングセンター「大東SCグリーンシティ」の四差路を左折、しばらく歩くと大きな川に出る。わたしの姓と同じ「赤川」。庄原にも、赤川や濁川という地名がある。山から崩した土砂を水路に流し、比重の重い砂鉄を採集する鉄穴流し。そのため、川の水が赤く濁ったのが地名の由来、といわれている。古くからの砂鉄の産地を流れる赤川も、そうした伝承があるのではないかと検索してみたが、文献を見つけることはできなかった。

赤川大橋を渡って、川の上流方向に進むと島根県立大東高等学校が見えてくる。その裏山に加多神社がある。祝日なので、高く掲げられた日の丸がはためいて



赤川沿いの遊歩道

ている。ミンミン蝉が合唱、ときおりツククボウシの鳴き声も混じる。まともな蝉の声を聞いたのは、今年初めてのよう気がする。

参道を登ると、中腹に小さな楼門がある。その門の前には、尾を上げた「出雲構え獅子」。他の2対の狛犬はお坐り型なのだが、単に制作した時代の相違？それとも、何か意味があるのだろうか。堂々たる注連（しめ）縄のある拝殿で、

最後まで歩けるように祈願した。出雲國風土記に「加多社」の名前で出てくる古（いにしえ）の神社で、主祀神は少彦名命（すくなひこなのみこと）。大東高校のグラウンド造成工事の際に、多くの土師器や勾玉などが出土。古墳時代の遺跡の上に鎮座している社である。「加多」は「神田」が語源ではないかといわれている。

赤川の土手の遊歩道を歩いた。大きな自然石の石塔がある。風化して判読できないが、解説板によると「南無阿弥陀仏」と刻んであるらしい。昔、近くに処刑場があり、神田橋の袂で晒し首にされていた。そのすぐ上流で、洪水時に出た大きな石を川底から引き上げて、供養塔にしたという。当初は「無縁地蔵」と呼ばれていたのが、いつの間にか「鳴子地蔵」になり、場所も二転三転して現在に至ると記されている。

赤川の川原に降りてみた。

昨日の雨で水量が増して、水溜まりを越えないと川原に渡れない。裸足になる石を見て廻る。お目当ては金屎（鉄滓）、たたら製鉄で出る不純物だ。穴がいくつも空いた黒い石を見つけて、これだと思った。もう一つ、溶岩の欠片のような小さな石。しかし、自宅に持ち帰って磁石を近づけてみたが、くっつかない。よくよく見ると、黒い石の方には熔けた形跡はなく、金屎ではないようだ。赤川の金屎は、次回以降の宿題である。

水の中を見て驚いた。小さなカワニナが川底にびっしり。ホタルの幼虫の餌となる黒い巻貝。大東町のホタルは、今から約250年前、松江藩7代藩主松平治郷（不昧公）が京都の宇治からお茶の製法を大東に伝授させた時に、ゲンジホタルを持ち帰り、赤川沿いに放したものが繁殖したと伝えられている。

昭和30年代になって、河川の汚染や水害の復旧工事などで護岸がコンクリートで固められ、ホタルの数が激減。それを憂いた地元の有志によって、昭和58年「赤川ほたる保存会」が結成され、地道な活動で赤川のホタルが復活した。

これだけの量のカワニナをたらふく食べて育ったホタルは元気がいっぱい、ホタルが乱舞する光景を思い浮かべた。本物が見られるのは、5月下旬から6月上旬。いつかは見てみたいと思う。

ハロー注意報②②

——進駐軍がいた町のはなし

M・Pはジェントルマン 松岡初枝

昭和三十八、九年頃になると、当地の基地も自衛隊の隊員数が多くなくなり、その分米軍の軍人数が少なくなっていた。それでもまだ残ったG I達が見ることがあって、M・Pのヘルメットを被ったG Iが二人乗りで走

るジープは町の風物詩のようになっていた。

昭和三十八年、私が中学三年生になった頃にはベトナムで、ゴ・ジュン・ジェム政権が仏教徒の弾圧を始め、焼身自殺で抗議する僧侶のショックな映像がテレビで流れたり、南ベトナムでは親米政権が力を持ったりして、世の中がザワツキ始めていた。

そんな世界情勢の中で生徒会の副会長に選出された私は、受験勉強もある中で多忙な日々をすごしていた。私に通っていた中学は、二年前に統合されて出来た新しい学校で、何事も斬新な試みを実行する校風だった。生徒が自主運営する組織は多岐に渡り、文化祭、体育祭、弁論大会なども生徒主導で行っていた。中でも学校新聞を発行する『新聞社』、校内放送をする『放送局』、『図書館』、文具や昼食

のパンなどを仕入れして売る『購買部』なども自主運営していた。

そんな中、私は初代の新聞社長になった。各学年四人の社員と顧問の先生が二人で、年に四回発行する新聞を作った。総務部、社会部、文化部、体育部、に分かれて記事を作る。社長の私は論説も書いていた。当時の世相から、社会部はベトナムや日本のニュース。特に一九六三年、昭和

三十八年にアメリカのケネディ大統領が暗殺され、そのニュースが衛星放送初のニュースとして流された時には号外も出した。なにしろ“ガリ版刷り”の時代だったので、夜中までガリ切りをした。航空自衛隊入間基地に『ナイキ』が配備された時には「ナイキ配備に思う」と論説を書いたが、世界の大きな動き、特に東西冷戦時代の中で、中学生といえどもボンヤリと過ごしていなかったと思う。国内では十二月にプロレスの人気者『力道山』が暴力団員に刺殺された時は社会部が記事を書いた。男子部員が力一杯書いた記事は圧巻だった。特に忘れられないのは、顧問の女性教師が私達の卒業の時に「みんなよく頑張って立派な新聞を発行してくれてありがとう。三年生は卒業しますが、次の学年の人達もしつ

かり良い新聞を作りましょう」と言ってくれたことだ。私の中学時代は、良くも悪くも日本国内も世界情勢も激動の時代であったと思うのだ。

忙しく動き廻っていた生徒会役員達は、いつも下校時刻の最後のチャイムの後まで活動していたので、家路につく頃には暗くなるが多かった。デコボコ三人組の副会長の私、書記のタカシ君、会計監査のイサムちゃんはいつも三人で一緒に帰っていた。タカシ君とイサムちゃんは、わざわざ遠回りして私を送ってくれていたのも、私の家の大人達もこの二人には感謝をしていた。後に生涯の友として長い付き合いができたのも、この頃から始まったので、何を言っても気にしない本当に良い仲間だった三人なのだ。

夏休みが近づいたある日、空が暗くなり、夕立ちが近づいていた。この日ばかりは先生が「早く帰れ！雨や雷が来るぞー」と言い、残りの作業も放り出して下校した。何しろ学校は入間川を渡った所にあつたので、どの道橋を渡らなければならぬ。タカシ君とイサムちゃんは家に近い橋を通って帰ると言った。私は独りで走っていた。雨は急に激しくなり、通学カバンを頭に乘せて走っ



中学三年生の私（著者）



米軍大型ヘリ、音がとてもうるさかった!



米軍御用達の西部通運

ていると、すぐ横にM・Pのジープが止まった。いつものオープンカーに幌をかけていて、中には白人と黒人の二人のM・Pが乗っていた。「ヘーイ! レッツ、オンザカー!」「シユット・ビー、オンザカー!」。ラッキーと思ってすぐにジープに乗った。「サンキュー、ソウ・マッチ」。雨も雷も激しく強くなり、幌がバタバタ音をたてていた。「フエア・アーユアハウス?」「ゴー、ストレート・プリーズ」「O・K」。その後は「ライト・プリーズ」

「レフト・プリーズ」とか言いながら道案内したが、今思えばそうとうブロークイングリッシュだった。やつと家の前まで来てジープから降り「サンキュー」と言うと「ユー・アー・ウェルカム」と言って笑いながら二人のM・Pが去って行った。

「はっちゃん、M・Pに送って貰ったの?」店の中から母が飛び出すように来て、タオルを渡してくれた。「うん、そうよ。助かつちやった」「あんたさあ:米兵がいい人ばかりじゃあないのよ」「だって雷がすごくて怖かったし:雨だつて強いんだもの:」「もう:この次は無しだよ。女の子一人でジープに乗せて貰っちゃダメなんだからね!」「はい」。母も祖母も呆れ顔で私を見ていたが、「ジェントルマンだったよ」と言って部屋に入り着換えながら「だつていい人だった:」心の中の不満でブツブツ言っていた。

後に沖縄などで米兵によるレイプ事件などがあつたのを知り、家族が心配した理由が判つたが、それでもあの時のM・P二人は本当にジェントルマンだつたと思う。「アーユージュニアハイスクール?」「イエース」「ピースタデイ・ハード!」。やっぱりいい人だつた。従弟のビルやバビーが大きくなら、サイズモアさんと同じように軍人になるのだろうかと思つたり、ゴボーさん、リチャードさんやトムさん達を知っている私は、米軍人達とジェントルマンだと

思っていた。あの時のジープに乗せてくれた二人も、私から見れば優しいお兄さんのような人だつたと今でも思っている。

昭和という時代は、とにかくめぐるしく世の中が動いていたと思う。日本国内では新幹線が開通したり、東京オリンピックが行われたり、数年後には大阪で万国博覧会がひらかれたりしたので、“もはや戦後ではない”のスローガンの下で右肩上がりの経済と、古い価値から新しい世界へと人々の目が大きく動いた時だつたと思う。ベトナム戦争が激化していったり、アメリカンポップアートやフォークソングが流行し、ザ・ビートルズの出現があつたりと、世界という大鍋の中はグチャグチャ、グルグルとカオス状態だつたと思う。

小柄な老婦人が店に入って来た。初見だろうか。少し大ぶりのブラウンのサングラスをしている。「中谷でございます」

そう名乗って頭を下げた。

「ああ、啓介君の……」

「祖母でございます」

上品な笑みを浮かべながら、ぐるりと店内を見渡した。

「すごい本ですね。わたしも本が大好きだったんですが、目を悪くしましてね。手術してからは、活字が読めなくなりました」

「ご主人には、何度か来ていただいたことがあります」

啓介君の祖父、中谷建蔵氏は地元郷土史の勉強会のメンバーで、店にも時折顔を見せていた。亡くなったのは、三年前ぐらいだろうか。

「この度は、啓介がいろいろとご面倒をおかけしまして、申し訳ございません。一度、ご挨拶に来させてもらおうと思っていたのですが、遅くなってしまう……」

手提げの紙袋から、分厚い菓子折りを取り出してカウンターに置いた。椅子に坐っている山本文吾さんが、ニヤリと笑った。酒好きのくせに、甘いものにも目がないのだ。

「例の軍事郵便葉書のごことは、ご存

じでしたか？」

文吾さんが問いかけた。

「気づきませんでした。主人に勧められて、あの文庫本を読んだことがあるのですが、そのときは葉書は挟んでありませんでした。主人が管理していたんだと思います」

「ご主人とお孫さん……、啓介君との仲はどうですか？」

続けて尋ねた。

ラブレター

(後編)

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 105

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「昔気質（かたぎ）の人ですから、啓介は怖かったと思いますよ。でも、主人の方は、啓介のことをいつも気にかけていました。やさしい子なんです。が、気難しいところもありますからね」

東京の高校でトラブルを抱えて、不登校になっていたという話を、学校関係者の知人から聞いたことがあ

て来た理由のようだ。

「いろいろとご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくお願いします」

こちらが恐縮してしまうほどに、深々と頭を下げた。

深々と頭を下げていている啓介君がいる。

「あれ、驚かないんですか？　もしか

展のサイトを検索して、入選者に中谷啓介の名前があるのを確認した。草書など簡単に書けるはずである。「ぼくの名前は、爺ちゃんが付けてくれたんです」

啓介君が説明を始めた。

「命名の由来は山岡啓介、爺ちゃんの父親、ぼくにはひい爺ちゃんの中谷耕蔵の親友だった人です。空軍のパイロットで、敵のグラマンを何機も撃墜した英雄でした。子供だった爺ちゃんの憧れの人で、啓介さんのようにゼロ戦の操縦桿を握るのが夢だったと言っていました。山岡啓介さんは太平洋のトラック諸島で戦死。でも、戦死公報が届いただけで、遺骨もありませんでした。それでも英霊の帰還ですから、町では盛大な葬儀が行われて、遺族の家には『誉れの家』の標識が掲げられたそうです」

して、気づいてました？」

文吾さんが苦笑を浮かべて頷いた。「もしかしたら、とは思っていたんだ。草書の墨痕が新しい感じがしたんですね」

「煤をまげて古色を出したんですが……」

悪びれた様子はない。

「書道五段だそうだね」

インターネットでいろいろな書道

「戦後になって、爺ちゃんに息子が生まれた。ぼくの父親です。本当はその子供に、啓介と名付けるつもりだった。しかし、戦死した者の名前を付けるのは縁起が悪いと、親戚の一人が大反対した。何人も殺した戦争犯罪人じゃないか、とまで言われたそうです」



戦前と戦後では、価値観が百八十度変わってしまった。

「さすがに孫の名前のときは、文句を言う人はいませんでした。山岡啓介という名前を覚えている人は、もうほとんどいなかったんです。爺ちゃんが死んで、こっちで暮らすようになって、山岡啓介さんのことを少し調べてみました。山岡家は跡取りが無く、かなり前に家が途絶えてしまったようです。墓の場所さえわからない。かわいそうだと思います。国のために

命をかけて尽くしたのに、誰も覚えていない。名前をもらった山岡啓介さんのために、何かをしてあげいと思っただんです」

「たまたま祖父父母の実家で、未使用の軍事郵便葉書を見つけて、今回のことを思いついたのだという。」

「神杉綾乃さんのことは、君のお爺さん……、建蔵さんから聞いたのかな？」

「文吾さんの問いかけに、啓介君が頷いた。」

「高等小学校の同級生で、山岡啓介さんの初恋の人だったようですね。」

「爺ちゃんも、とてもきれいな人だったと言っていました。綾乃さんのお兄さんも戦死して、婿取りをして家を継いだそうです」

「恋愛など許される時代ではなかった。」

「葉書に著名をしなかった理由が、よくわからないんだが……」

「矛盾するようですが、嘘は書きたくなかった。葉書に書いたことは、自分なりに山岡啓介さんのことを真剣に考えて出てきた言葉です。倉田百三の『出家とその弟子』を読んで、図書館の戦争関連の本をたくさん読んで、自分の心に浮かんできた言葉なんです。それを、綾乃さんの墓前

に報告したかった。でも、山岡啓介さんの言葉ではないんです」

「まだるっこしい説明だが、純粋な気持ちには伝わってきた。」

「彼女……、加奈ちゃんには、本当のことを話したの？」

「しばし間が空いて、「はい」と答えた。」

「なんだか自分だけ熱くなって空回りしているような気がして、やっていることが無意味に思えてきたんです。彼女に全部、自分の気持ちも含めて話しました」

「結果は？」

「条件を出されました。百通のラブレターを書いて届けたら、許してくれるそうです」

「それって、ひよっとして、彼女からの告白？」

「思わず声が出てしまった。啓介君が顔を紅くして頭を掻いた。文吾さんがポケットから缶コーヒーを取り出すと、栓を開けて、啓介君に向かって掲げた。」

「青春に乾杯！」

「おれ、ルポライターを目指します。いつか、山岡啓介さんのことも書くつもりです」

「文吾さんが破願して、缶コーヒーを口に運んだ。」

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週日・月・火曜日
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30 (昼食休憩 12:00～12:30)

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から) ※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第五部 人物を見る

十月五日 達磨(だるま) 忌

達磨は達磨大師、円覚大師ともいう。生没年は未詳で禅宗の始祖である。言い伝えでは、インドに生まれて中国に渡り、嵩山(すうざん)の少林寺で九年間の座禅によって大悟、法を慧可(えか)に伝えたという。

十月六日 渋川春海没

天文学、暦学者。明正十六(一六三九)〜正徳五(一七一五)年。渋川春海は徳川家康の碁師・保井

算哲の子供だった。父の死後わずか十四才で父の後を継ぎ、碁所につとめた。この縁で水戸の徳川光圀や会津藩主・保科正元などに目をかけられたのである。

また、彼は幼少から天文・暦術にも通じ、哲学者の岡野井玄貞や松田順承に師事し、神道学者の山崎闇斎の門にも入り、闇斎から「正に天下の逸材、千歳の一人」と激賞された。

春海は中国の授時暦を研究し、幕府に宣明暦を廃止して授時暦を採用するよう進言、寛文十三(一六七三)



「奥の細道行脚之図」、芭蕉(左)と曾良(森川許六作)

年に改暦案を上程したが、とりあげられなかった。その後、天和三(一六八三)年に、こんどは授時暦ではなく、自ら作りあげた新暦法(大和暦)による改暦案を上程し、いったんは拒否されたが、ついに採用に成功した。これが有名な「貞享暦」で、日本人によるはじめての暦法である。

貞享暦作成の功により、春海は貞享元(一六八四)年に幕府天文方に任ぜられ、それまで京都が握っていた造暦の実権を江戸へ移した。それから、幕府天文方としての渋川家は幕末まで継承された。

十月十二日 芭蕉(ばしょう) 忌

松尾芭蕉、俳人。正保元(一六四四)

年、元禄七(一六九四)年。伊賀国(三重県)上野の生まれ。本名、甚七郎重房といった。父は松尾与左衛門、母は伊予国(愛媛県)宇和島の百地の出。その次男で、幼い時から才気にたけており、藩主藤堂家の後継ぎ良忠に仕えた。

二歳年上の良忠は蟬吟(せんぎん)の号で京都の北村季吟に師事して俳諧をたしなんでいたもので、芭蕉も感化されて、その道に入り俳諧に直接出会ったのである。芭蕉二十三歳、寛文七(一六六七)年に良忠(蟬吟)が病死したので、むりに主家を出て、

京都の北村季吟のもとで、学問や俳諧の道に励んだ。

寛文十二(一六七二)年二十九歳、最初の著作『貝おほひ』(句合くあわせ)を故郷上野の天満宮に奉納した。さらに、江戸に出て小石川の水道工事で働き、新興の談林俳諧にも親しみ、次第に名声もあがり、門人の数も増えていった。

三十七歳、延宝八(一六八〇)年に門人杉風(さんふう)の世話で深川に庵を結んで、門人李下(りか)が庭に芭蕉を植えたので、「芭蕉庵」と呼ばれた。そして、芭蕉自身もまた桃青の号とともに芭蕉の俳号を用いるようになった。従来の談林俳諧の卑俗さを振り切り、新鮮な創造の気魄をたぎらせた。

貞享元(一六八四)年四十一歳、旅立つが、これから他界するまでの十年間はほとんど旅の生活を中心に大自然の生命の琴線にふれ、自己の世界をひたすら深めることに努めた。貞享二(一六八五)年『野ざらし紀行』、貞享四(一六八七)年『卯辰紀行』を経て、元禄二(一六八九)年門人曾良を伴い江戸をあとにし、『奥の細道』の旅に出た。

ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(13)

マック☆ヤマザキ

昔、映画館で見た「シネマスコープ」の画面が、ジョッキングしている目の前にあるようだった。インターラーケンの街とトゥーン湖、はるか前方の雪渓山を目の前に走っていた。ひたひたと波打つ湖面に見とれていた。突然、前方の雪渓の稜線から矢のように飛び立った黒い物体が目に入り、すぐに姿を見失った。数年前スイスに来た時のガイドさんの解説を思い出した。スイスは「永世中立国」、自国に攻めてくる敵に対しては国を

守るため戦うが、他国に出て行ってまで攻撃することはないと。スイスは、20歳から50歳までの男性全員が徴兵制度の対象なのだ。50歳以上の男性は予備軍として、いざという時、国から預かっている銃を携えて参戦するらしい。黒い物体の謎が解けた。戦闘機が宙返りを繰り返し、雪山の一角を標的として射撃訓練をしているのだ。

二つのラーケン(湖)、トゥーン湖とブリエンツ湖の間(インター)に

あるから「二つの湖の間」、町名の由来である。

走りながら、道路わきを気にかけた。2年前の9月、ローザンヌ(インターラーケンから電車で約2時間)を訪れたときのことだった。レマン湖で夕方のジョッキングをしていると、道路わきに1メートルくらいの高さの、

プラスチック製の緑色のポスト(写真)が数100mおきに備えてあった。立ち止まって見ると、ワンちゃんのお尻から出た固形物がイラストで印刷。犬の糞を備え付けのビニールの袋に入れて飼い主が始末するためのものなのだ。違反すると多額の罰金がかげられる。

余談だが、今まで通って来たヨーロッパの都市でも、レストラン、駅、飛行場などの公共トイレを除いて、すべてが有料(ペイ・トイレット)で、一人当たり約40円〜50円の使用料金が課されていた。

1時間ほどで体を調整するジョッキングを終えた。午後は学生たちのうち2名が大阪に帰るので、チューリッヒ空港まで見送る予定だった。彼女たちは大阪花博覧会のコンパニオンとして働くため帰国する。

インターラーケン・ウエスト駅から3つ目の駅、ベルンでチューリッヒ空港まで行くインターシティー(都市間を移動する高速列車)に乗り換え。チューリッヒ空港では彼女たちが今回の旅行で過ごしたフランクフルト(ドイツ)経由で成田、伊丹へと帰国できるよう、日本航空で手配した。

カウンターで航空券とパスポート

を確認してもらい、スーツケースは成田を経由し、必ず伊丹空港に送られるよう身振り手振りを使って手続き。その姿を彼女たちに見てもらうのも意義がある。ちよっと気障(きざ)と思えたが「ボンボ・ヤージ！」と言って、通関手続きに向かわせた。

ホテルへの車中で考えた。「日本を出てから14日目、旅行の半分だな。海外から見て、我が国がいかに信頼されているか理解してくれたかな?」。午後8時20分にインターラーケン・ウエスト駅に降り着く。ホテルに着くと、オーナー夫人が待ち構えていて「一人の学生の鍵が残されたままなのです」。今、学生が立ち寄りそうな駅に電話して調べているという。

鉄道は、雪と吹雪のため今日一日中動いておらず、バスが代替便として運行されていた。早帰りのメンバーに問いただして、三宅君がトイレット・ストップでバスに乗り遅れたであろうと推測。みんなで心配しているところに、本人が何事もなかったように帰って来た。今日も無事に終わったが、たくさんの出来事があった。

明日の出発は早い! 4時30分のモーニングコールから始まる。



どらくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

長生きをしたいと歩く霧の中

近藤 昌平

病棟の窓からわずかな秋の空

原博己

大夕焼け瀬戸内海へ映りけり

片岡 正人

南瓜熟れ風の変わりし昼下がり

隆愚

特大の団に捕はれし秋茜

大楨 三代子

満月やピザ屋に入る親子づれ

寺内 龍二

本閉じて売れ残りの南瓜煮る

赤川 冬人

祖父母は孫どちに語り連れ歩き

松岡 初枝

今思出が宝と思ほゆ

「ちいさなぐらし」 赤川仁洋

投稿&寄稿

候のことば

「蟋蟀在戸」

隆愚

暦の上の二十四節気七十二候で、寒露の末候を「蟋蟀在戸」（きりぎりすとにあり）の候といえます。新暦では、およそ十月十八日から十月

二十二日頃。戸口で虫が鳴く頃です。山野に出かけて虫の声を楽しむ事を虫聞きといえます。昔は「こおろぎ」の事を「きりぎりす」といったそうです。どちらも秋に鳴く虫の総称として使われた言葉で、特定の虫をさしているのではないのでしょうか。現在では、「蟋蟀」と書いて「こおろぎ」と読ませます。

虫というだけでも、秋に鳴く虫をさし、すだく声は、時雨にたとえられました。「虫時雨」とともに、秋は深まっていきます。

「きりぎりす」は別名を機織り虫。鳴く声がギーチョンギーチョンと機織りの様に聞こえるからです。「こおろぎ」の鳴く声の風情は、万葉集に歌われていたといえます。昔は、「こおろぎ」の声を「肩刺せ裾刺せ綴れ刺せ」（肩を縫いなさい、裾を縫いなさい、針仕事をしなさい）などと聞いて、冬支度の繕いをしたそうです。そこから名付けられた「綴れ刺せ蟋蟀」のほかにも、「閻魔蟋蟀」や「阿亀（おかめ）蟋蟀」など、蟋蟀の仲間はなかなかの個性派そろいです。

広島駅に行った。駅ビルが春先にリニューアルオープン、祝日ということもあって人出が凄い。2階の「自由通路」を歩いてみる。きらびやかな店が並んでいるが、欲しいものがあるわけでもなく、市電乗り場まで往復しただけで駅の外に出た。用件を済ませて、午後には広島駅に戻った。改札から一階のホームに降

りると、ここは以前のままの雰囲気。山陽本線で2駅先の向洋駅で降車。歩いて12分程の住宅街に「ギヤラリーカフェ・アム」がある。「ちいさなぐらし」五嶋千絵個展（21〜30日）が開催されている。五嶋さんは、2015年に縁あって庄原市口和町の集落に移住。広島市立大学、同大学院で油絵を学んだという本格派だ。プロフィールの最後に「現在4児の母、半農半絵描き」と記されている。

カエルや蝶、草花や果実などの身の回りの「ちいさなもの」が描かれている。あまりかわいくないのがい。共に生きるものへの敬意と共感が伝わってくる。都会の雑踏でざらついた心が澄んでくる。やっぱり、古里はいい！



「ちいさなぐらし」五嶋千絵 個展
9.21(土)〜30(木) / ギャラリー・カフェ・アム

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家（徳岡佛性坊）として多彩な
活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品
の展示販売を、どら書房の一角でしていま
す。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を
展示しています。あなたのお気に入りの逸
品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意！

庄原を想う会・比婆山御陵ツアー (参加者募集)

～庄原の宝物、
イザナミ神の御陵に参拝しませんか？～

日時：11月1日（土）午前9時30分

雨天延期は11月3日（月）

集合場所：立烏帽子駐車場（庄原市西城町熊野）

対象者：小学3年生以上（小学生は保護者同伴）

参加費：500円（小・中学生300円）

ガイド：岡田操氏（ツイハラの会副会長）

コース：立烏帽子駐車場～比婆山御陵（御陵祭）

～立烏帽子駐車場（歩行約3時間）

持ち物：お弁当、十分な飲み物、ビニールシート、

防虫ネット、歩きやすい靴・服装、体温調整
できる上着

申込先：080-3631-9125（やない）

shobara.omou@gmail.com

主催：庄原を想う会

申込締切：10月28日（火）

「ぐんぐん伸びよう会」

（教室：庄原市川西町241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ）

黒板のない教室、学年の枠のない教室、一人ひとり自分の能力にあった内容を学習する教室

ここ「ぐんぐん伸びよう会」の教室では、ピアノ、習字、スイミング等と同様に、
一人ひとりに合った内容を学習して**スモールステップで進んでいきます。**

多くの子ども達に「**やればできる**」という**成功体験**を味わってもらい、
目がキラキラした子ども達で、この地域がいっぱいになってほしいと願っています。



無料体験学習受付中！！

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183

協賛：九日市愛好会

編集後記

◇先月号のハロー注意報②、勝隆大叔父が事故で悪くしたのは「目」ではなく「耳」。初期配布のものは未訂正、申し訳ありませんでした。

◇空地の草刈りをしたのですが、今年は猛暑で茎が太くて背が高い。おまけにハチの巣があったようで、アシナガバチの軍団に襲われました。3匹に刺されたのですが、激痛、痛みや痒みが長引いて、大変だと思ひ知りました。

◇久しぶりの取材旅行。歩かないと衰えるけど、無理もできない。厄介です（苦笑）

◇長い酷暑だったですね。どうにか耐えきった、というのが正直な気持ち。残暑が長引いた分、冬になるのを遅らせてほしいですね。

第288回

くんちいち

ひょうばの九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



10月9日(水)

9:00～13:00

※通常時間に戻ります。

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
10月8日(水)～10日(金) 10時～15時
「第21回庄原絵手紙大賞作品展」

★どら書房、休憩室あります。

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き

★お休み処(まちなか広場)あります！
九日市で買った昼食をゆっくり食べてください。
※ゴミ箱用意しています！

★あなたも自分のお店を出してみませんか？(出店者募集中！)

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

